2003 年 6 月 24 日

人間科学研究科委員長殿

荒井魏氏の博士学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが、2003 年 6 月 24 日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告します。

記

1. 申請者氏名　荒井魏
2. 論文題目　　良寛の生き方と思想の現代的意味――エイジング、生涯学習などの視点から――

3. 本論文の主旨

人間科学は人間発達を中軸に据え、そこから派生する多様な課題を研究対象に置いて、斯界に貢献してきた。人間発達課題の立て方は研究の方法論との連関によって特徴を付与されることになる。『良寛の生き方と思想の現代的意味』は歴史上の人物を思想形成の側から接近し、時代の隔を貫いて現代に訴えているものを読み取ろうとする企図をもっている。そしてこの企てを副題に選ばれた「エイジング、生涯学習などの視点から」遂及しようとするものである。

人間発達を考察する際の有力な手がかりの 1 つは、個人的な年齢と歴史的な時代という尺度を異にする 2 つの時間を工夫して行なわれることがある。標準年齢的影響と標準歴史的影響と非標準的影響という次元の異なる 3 つのインフリューエンシャルを識別して、それらが空間と時間そして個人にいかなる形象を刻印するかを記述するのである。

本論文は良寛という歴史上の人物を彼が生きた時代の背景にもどして、そこで良寛が行動し、語り、喜び、悲しみ、悩む生涯を復元している。この復元は彼の思想の根幹にある無一物、愛の思想、是非論のいましめ、一方では商品経済が農村社会へ浸透し、生活構造が貨幣経済に巻きこまれることによる地域社会の改組変動、こうした大きな歴史的な動向の中で地域社会に生きる良寛を含む人々の喜怒哀楽を良寛の詩歌、書画の作品分析により、一介の僧としての地域住民との托鉢による交わり、子どもたちとの手毬やおはじき遊びなどから地域社会の有様に測鉛を下している。

良寛は認知度の高い歴史上の人物である。「足跡を訪れたい歴史上の人物」についての新潟県民調査（2001 年 8 月）によると、芭蕉 48.9%、良寛 41.5%、一休 20.1%とつづく。しかも芭蕉はかく呼ばれることはないが、良寛さん、一休さんと親しまれていることも付け加えて、今、なぜ、良寛なのかに本論文は迫っている。「今、なぜ良寛」なのかは本論文の良寛研究史録に詳しいが、その一端は文献出現数にうかがえる。良寛研究の文献は明治期は年数点、大正・昭和期は歌誌、新聞の媒体が飛躍的に増えたことも手伝って年平均 2

桁の良寛研究文献が発表されている。途絶えることのない良寛への傾倒であり、関心の顕示である。本論文は、このような現象への人間科学的接近、特に発達論的考察を良寛の思想形成に焦点を当て奥行きのある記述によって実現している。

4. 本論文の構成

本論は、良寛という人口に膾炙した歴史的人物の人間発達論的研究であるところに本論文の特徴があるというにとどまらず、これまでに刊行されてきたおびただしい研究成果にもとづきながら、以下のように論述を構成することにおいて、本論文の特徴を演出している。

「序論　なぜ今、良寛思想、生き方か」は社会的な長寿化と生涯学習社会を鍵概念に物と心の豊かさの受けとり方、ライフスタイルにもとづく環境問題への視点や戦争と平和への是非論からの問題提起にふれ、そういう視点から本論文を良寛研究史の中に位置づけている。

このような基本にもとづいて本論文は 14 の章を立てて課題を展開している。

第 1 章は従来の良寛研究の流れを概観し、そこに浮き彫りにされた良寛像の問題点を紹介、考察し、人間良寛に迫る研究の意義にふれている。

第 2 章は、良寛の出生と家庭環境の問題を取り上げる。特に理想化された家庭環境を含む一種の良寛伝説の問題と、母親に関する新事実の発見を機に複雑な家庭環境であったことを明らかにし、良寛像を相対化する。

第 3 章は、そうした複雑な家庭環境における父母と良寛の関係、衰退に向かっていた実家の背景、衰退を横目に俳句三昧の風雅の道を歩んだ父以南と良寛の微妙な関係などから謎の多い幼少期の良寛に言及する。

第 4 章は、青春期の学問の師、大森子陽の正義感あふれる性格、その子陽から学んだこと、子陽塾の同窓生たちとの交際を通じての思春期の良寛の人格形成に及ぼした影響などを探る。

第 5 章は、良寛研究の中で最も議論の多い出家理由について考察する。従来の良寛出家説を紹介しつつ、父親に反抗しての出奔・出家の可能性が高いことを論証する。この出家問題は、後の人間良寛の形成に決定的な出来事となるのである。

第 6 章は、良寛が家出・出奔したこの時期にあったと思われる宗竜禅師の人柄、出会いの状況などを手がかりに、良寛の人間形成に及ぼした宗竜の影響を考える。

第 7 章は、名僧国仙との出会い、備中・玉島（現在の岡山県倉敷市）の円通寺における修行、国仙から受けた人間的影響などにふれる。

第 8 章は、良寛の帰郷事情、良寛に大打撃を与えたと思われる父親の以南の失踪事件に注目して論及する。

第 9 章は、様々な人生体験を経た良寛が晩年に到達して思想の中で中核を占める無一物思想に焦点を当て、その思想背景とそれが現代に問い掛けていること、さらに自然体の思

想などに言及する。

第 10 章は、無一物思想とともに良寛思想の中核を占める愛の思想の具体的中身、その今日的意味、さらに平和の問題とつながる是非論などについての良寛の考え方に追っている。

第 11 章では、良寛が国上山山中の五合庵、乙子神社草庵などに暮らしながら庶民との交流の中で果たした役割を考える。良寛をいわゆる隠者、風変わりな人里離れて勝手気ままな生活を送った人という誤解が根強くあるが、無一物に近い生活に徹しながら庶民の生活に深く入り込み、余暇を楽しみ、地域社会への様々な貢献ぶりを明らかにしている。

第 12 章は、詩歌、書などの芸術において現代風に言うならば旺盛な学習精神を発揮していたこと、それが良寛の一生をいかに瑞々しく豊かなものにしていたかを探索する。

第 13 章は、良寛も人並みに老いや病、孤独といったエイジングに伴うさまざまな問題を抱えていた。こうした問題を良寛はどう乗り越えていたのか、そして 40 歳も年下の貞心尼との最晩年の恋とも言われる出会いはどうして生まれたのかなど、良寛の生き方に迫っている。

第 14 章は、死の床でも詩歌、書への関心を忘れず貫いた生き方、そして貞心尼の問い掛けに「うらを見せおもてを見せてちるもみぢ」と、最後の思いを自然体の生き方を象徴する句で答えた良寛の死の状況にみてとれる意味を深めている。

総論「良寛の生き方と思想のメッセージ」。生涯学習社会、あるいはエイジングの問題に良寛の思想・生き方はどのような意味をもつのかを検証する。さらに戦争、テロ、教育の荒廃、環境破壊など混沌とした現代社会へのメッセージとして、改めて良寛の生き方と思想を追い、今後の良寛研究の方向性を示し現代性を強調している。

良寛の一生は近代に入って相馬御風、坪内逍遥、夏目漱石をはじめ、現代では水上勉、吉本隆明、吉野秀雄、中野孝次など多くの思想家や文筆家によって解明が試みられているが、今なお全体的に謎が多い。

本論文は良寛自身が語っていることを手がかりに、エイジング、余暇、生涯学習といった現代的テーマに立って良寛像を探っている。その点で新しい良寛研究を開拓する先導的な試みである。

5. 本論文の評価

本論文は日本人の精神構造の特徴を、人物に仮託させるとすれば指名される確率の高い人物の生き方と思想形成をとおして、現代における意味を問うている。このことのためにとった論述は、人間発達論的であること、あるいは人間科学的な視点に立つ広角的な方法である。本論文は、近代の学芸上の歴史とに同じ位の長きに渡り言及され考証され論述されてきたこの人物像の形成に、エイジング・生涯学習の視点から迫っていることに本論文の従来になかった特徴があるといえる。

第 2 に、本論文は数千点に及ぶ文献考証を丁寧に行い、各文献の時代考証にもとづき、良寛研究史の細い襞の中にまで分け入って論文を作成しているところが肯定的に評価でき

る特徴である。状況証拠に流されるのでなく、事実にもとづいて研究人物の思想形成という内側の出来事に迫ろうとしているのである。

第 3 に、この姿勢は、人間発達研究における非標準的影響の資料の豊富化に貢献していることである。新しい観点を立てることは求めて難しい企ての１つである。こういう地味な作業によって、次の研究はより良い地歩を獲得するようになることから推して、貴重な一歩を研究史に刻印したといえる。

第 4 に、良寛が「良寛さん」と今もって親しまれている人柄の紹介にとどまらぬ良寛のライフスタイル研究に道をつけていることである。ライフスタイルを「所与の時代と利用可能な空間において、資源動員のし方」と仮に定義すれば、良寛の生き方の実践をとおして、彼の時代空間の有様を再現できる手がかりを案出していることを指摘できる。これは本論文が丁寧な文献考証を行っていることの成果の証明であり、本論文の成果の 1 つである。

荒井魏氏が提出した博士号請求論文『良寛の生き方と思想の現代的意味―エイジング、生涯学習などの視点から―』は、以上の評価をふまえ、博士（人間科学）に値すると審査委員会は判断するに至った。

2003 年 6 月 24 日

荒井魏氏学位申請論文審査委員会

主査　早稲田大学教授・文学博士（早大）　濱口晴彦
副査　早稲田大学教授・博士（人間科学）（早大）　蔵持不三也
副査　早稲田大学教授・博士（学術）（筑波大学）　寒川恒夫